



◎平松礼二 ◎ジヴェルニー、印象派美術館

平松礼二(1941年生まれ) ジヴェルニー、モネの池;微風 2013年
日本画 屏風六曲一双 180×720cm ジヴェルニー、印象派美術館 MDIC 2014.28.

モネは、多くの研究課題を次の世代に残しました。従って私は、それら優先事項のテーマを使いながら新しい作品を生み出して生きたいのです。

いかにしてあなたは、日本画の画材を用いて、モネのそれとは異なる美の表現に到達するのでしょうか？また、日本画の技巧とはどのようなものでしょうか？

平松：油絵では、欲しい色調を得るためには色を混ぜるということを行います。これによって、影、光、遠近法などを表現するのは容易です。それに比べて日本画の画材は遥かに利便性に欠けるのです。基本的に鉱石である顔料を混合することは出来ませんし、また画家の方でもそれは望みません。欲しい色調を得るには、色を重ねていくという方法を採用ののです。私たちは日本の桑の木の繊維から作られた厚い紙を使います。そこに、水を加えた鉱石の顔料に更に膠（にかわ）という動物系の接着剤を加え、紙に塗っていくのです。塗った後、次の顔料をその上に重ねて塗るためには、最初の顔料が乾くのを待たなくてはなりません。その次に塗る時も同じことですから、自分が望んでいる色調を得るまでには多くの回数を必要とします。このようにして日本画は、あれほど優しく、深く、細やかな色調を表すことができるのです。油絵の具のような強い色を作り出すことはできないのですが、それはまた私たちが望むものではありません。

2013年のジヴェルニーにおける私の個展の際、わたしは一点の試験的な作品を描き上げました。これは高さ1、80m幅6.80mの屏風です。私はモネがかつて絵を描いたという場所に陣取って、



平松礼二(1941年生まれ) 夕映の池—睡蓮序曲、2011年
日本画 屏風六曲一隻 180×420cm. ジヴェルニー、印象派美術館、MDIG 2013.1.6

彼と同じモチーフを描きました。顔料を重ねながら水面を描き、さらに装飾的な花びらを、金粉、銀粉、それに意図的に脱色した銀の箔を載せた銅箔を使い、表現しました。また、金色箔の使用で水に反映する雲を描き、泣き柳を唐墨で表現しました。睡蓮は空遠くを飛ぶように見えます。池の中には桜の花びらと楓の葉を加えました。このようにして、わたしは装飾的かつ遊び心に富んだ日本人のエスプリの表現を試みました。

2013年の展覧会の後、あなたはまた今年ジヴェルニーでやるわけですね。何があなたの最も真摯な願いでしょうか？

平松：ジヴェルニー印象派美術館は今年「ジャポニスム/印象派」、また「エドモン・クロスの幸福を描く」という展示会を開きます。こちらでは私は二度目の展覧会です。そこに平松の絵を掛けるわけです。きっとエドモン・クロスと他の点描画の作家たちのテクニックと日本画のそれを比べてみるのは興味深いはず。沢山の入場者を期待しております。自分としては実現したい夢をいくつか持っています。モネと他の日本人画家たちについてこれ以外にも研究をしなくてはなりません。私はとにかくこれからも、フランスと日本の美の系列の中で絵を描き続けていくことを望んでおります。

聞き手; B. K.-R.